第9章　剰余価値の率と総量

〔的場　「超訳『資本論』」ｐ.166〕

○○○○〇〇労賃が同じで利益を上げる

には、労働者の数を増やす

この章は、絶対的剰余価値の限界

の中に生じる矛盾を指摘し、第4篇

「相対的剰余価値」につなぐ役割を

もっている。なお、「労働力の再生産

に必要な必要労働時間は不変」が前

提となっている。したがって、1日6

時間と置けば、剰余価値率が50％だ

と剰余労働時間は3時間、100％だと

剰余労働時間は6時間となる。さら

に剰余価値それ自体を増大させるに

は、労働者の数を増やせばよいとな

る。

第1の法則　剰余価値を維持する

には、労働者の数が減少すれば労働

者の搾取度すなわち労働時間を引き

上げるしかない。（可変資本によって

生産される剰余価値の量は、前もっ

て雇われた可変資本の価値に剰余価

値率を掛けたものに等しい）

第2の法則　「24時間以上の労働

はありえない」という絶対的な限界

がある。

第3の法則　剰余価値率には限界

がある以上、剰余価値をあげるには、

労働者を多く雇うしかない。（剰余価

値の量は、剰余価値率を前もって雇

われた可変資本（労働者数）によって

決まる）

剰余価値の量を増やすためには労働者の数を増やす方が良いと言いながら、多くの資本家は、実際には労働者の数よりも、不変資本（機械）の方を増やしている。この問題は、労働者の雇用の増大と、資本主義の発展との問題との新しい関係が起きてくる。

規律社会への移行

労賃が同じで利益を上げるには、労働時間をあげる

**（剰余価値をどうやって増やすか）**

ｐ.535　可変資本の大きさは、同時に働かされる労働者の総数に比例する。

剰余価値率＝剰余労働（ⅿ）／必要労

働（v）

価値率が一定ならば、資本家にとっ

て剰余価値の総額は、労働者の数が多

いほど多額になる。

ⅿ／v×Ｖ

Ⅿ＝

　　　　　ｋ×ａ／ａ×ｎ

Ｍ－剰余価値の総量

ここの労働者により1日に提供され

る平均的剰余価値をⅿ、前貸しされる

可変資本をｖ、可変資本の総量をＶ、平

均労働力の価値をｋ，それの搾取度を

ａ／ａ、これはⅿ／ｖと同じである。労

働者総数をｎとする。

ｐ.536　生産される剰余価値の総量は、個々の労働者の労働日が提供する剰余価値に使用労働者の総数を掛けたものに等しい。

（剰余価値を増やすことの対する二つの制限）

○○○○〇〇第1の制限－必要労働時間が6時間

だとすると剰余労働時間は18時間を超

えられない。産業革命期でも15時間く

らいだった。1日の時間は限られている。

第2の制限－雇う労働者にも限界がある。ｃとｖのバランスを考える。

（可変資本の限界）